



あるじでえ

No.29

世田谷区教育委員会 民家園係

〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園

☎ 03(3417)8492

◎ 岡本公園民家園

☎ 03(3709)6959

平成8年3月1日 発行

平成15年10月 増刷

平成28年7月 増刷

次大夫堀公園民家園と世田谷の風景

I はじめに

昭和63年11月に開園された区立次大夫堀公園民家園はかつての農村風景を再現し、世田谷の歴史と文化を後世に伝えるために設立されました。そのために世田谷に残っていた江戸時代後期築造の農家を移築し、様々な伝統行事を執り行っています。

開園以来、来園者の数も年々増加し、平成7年度は8万人を越える人々が訪れています。現在旧大蔵村名主安藤家主屋の移築工事も進められており、より多くの区民に親しまれる施設として整備されているところです。

そこで今回の「あるじでえ」では、世田谷区民にとって次大夫堀公園民家園はどの

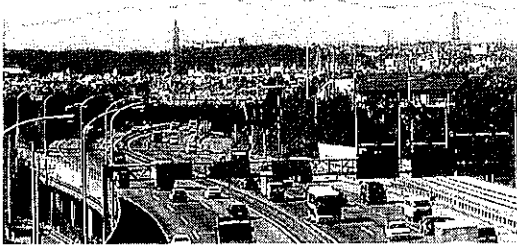


次大夫堀公園民家園の全景

ような施設であるべきなのかを考える出発点として、世田谷の風景について少し考えてみたいと思います。

II 風景の意味

「風景」を辞書で引いて見ると「①目の前に広がるながめ。景色。②その場のようす。情景。」と説明されています。また、風景の類似語である「景観^{けいかん}」を見ると「①けしき。ながめ。特に、すぐれたけしき。②人間の視覚によってとらえられる地表面の認識像。山川・植物などの自然景観と、耕地・交通路・市街地などの文化景観に分けられる。」と書かれています。(三省堂発行『大辞林』)



世田谷百景⑦東名高速の橋

風景も景観もともに人の目に映るまわりの景色を意味する言葉ですが、風景論を研究している学者達はこの2つの言葉を、違った意味を持つ言葉として使い分けています。

まず、風景は「風と日光」を指す中国の言葉で、8世紀中頃には既に杜甫や李白の詩の中で使われているそうです。

一方景観の方は、大正時代にある学者がドイツ語のLandschaft(ランドシャフト)の訳語として使うようになった造語なのだそうです。(阿部一)

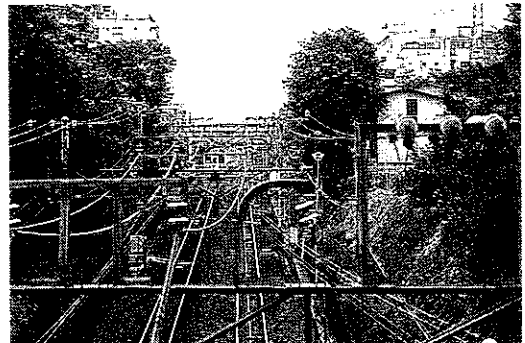
こうした歴史的な背景もあって、風景と景観を学術用語(研究のために、ある特定

の意味を持たせた言葉)として使う場合には、それぞれ次のような意味で使っています。

すなわち、景観は先に引用した辞書の説明「人間の視覚によってとらえられる地表面の認識像」一とあるように、人の目で見える範囲の实在物を指します。

一方風景は、そうした景観に対して、人が抱く感情までも含んだ言葉なのです。例えば1つの景色として、山の裾野^{すその}に田園が広がり、その間を小川が流れ、辺り一面には菜の花やレンゲ草が咲いている田舎の景色を思い浮かべてみてください。こうした景色を見たことのない都会育ちの人にとっては、それは単に美しいだけの景色として映ります。しかしながら、幼い頃にそうした景色の中で育った人にとっては単に美しいだけではありません。その景色を見ることによって友達や父母に対する思い出、あるいはふるさとへの思いが込み上げてくることでしょう。人によってはある景色の背後に、その人の人生が含まれていることもあるのです。このように歴史や文化や人々の生活あるいは感情までも含んだ景色が風景ということになります。

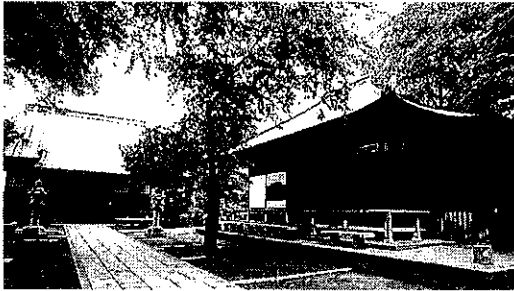
このような景観と風景の意味の違いをある学者は、「自然とその中に人間が配置した施設を含む場景を景観、それを人間が自己の心のなかであじわう情景を風景と呼んでいる。」と表現しています。(宮家準)



世田谷百景⑤成城の富士見橋と不動橋

Ⅲ 世田谷百景について

昭和59年、世田谷区では区民による投票を通じて、「世田谷百景」を選定しました。その趣旨は「世田谷に住む人々にとって大切な風景とは何か、それを明らかにして今後のまちづくりを考えてゆくきっかけにしよう」というものでした。また、「皆さんが『好ましい』と感じる風景の中で生活し、活動してゆくことを願って、そのような風景を守り育てる、あるいはつくってゆく」とも述べられています。(都市デザイン室)



世田谷百景⑥太子堂圓泉寺とけやき並木

世田谷百景に対する区民の関心は高く、投票数は92,000枚に達したとのこと。当時の世田谷の人口が779,000人ですから、区民8人に1人の割合で投票したことになります。

こうして区民によって選ばれた世田谷百景を分類したのが表1です。なお、各風景の説明文の前に付いている番号は、投票数の多い順に付けられた番号です。



世田谷百景⑩松陰神社と若林公園



世田谷百景⑮多摩川の緑と水

まず百景は大きく3つに分類することができます。Ⅰ群は自然を主題とした風景、Ⅱ群は自然と歴史を主題とした風景、Ⅲ群は歴史を主題とした風景です。そして各群ごとに類似した風景を集めて小分類すると、A~Kに分けられます。

Aは2景だけですが、「富士山の見える風景」です。2景とも橋の上からながめた風景で、⑮の下には小田急線が、そして⑯の下には東名高速道路が走っています。近代的建造物の遥かかなたに、悠久の昔から変わらぬまに響^{こび}える富士山と丹沢山系を望むことができます。

Bの「水辺の風景」は池と川の風景です。池が3景、川が4景含まれています。4景の川の中で1景が野川、3景が多摩川です。



世田谷百景⑭粕谷の竹林

Cは「武蔵野の風景」で、都市の中に残された、武蔵野を思わせる昔ながらの風景とすることができます。

表 1

I 群 自然を主題とした風景							
A：富士山の見える風景	B：水辺の風景	C：武蔵野の風景	D：名 木	E：公 園			
⑤成城の富士見橋と 不動橋 ⑦東名高速の橋	⑬烏山の鴨池 ⑭祖師谷つりがね池 ⑮成城学園の池 ⑯野川と 小田急ロマンスカー ⑰多摩川の緑と水 ⑱新二子橋からの眺め ⑲兵庫島	⑩粕谷の竹林 ⑪成城3・4丁目の崖線 ⑫岡本もみじが丘 ⑬玉川台自然観察の森 ⑭等々力渓谷と 等々力不動	①烏山西沢つつじ園 ②砧小学校の桜 ③大蔵の五尺藤	①世田谷公園 ②梅と桜の羽根木公園 ③北沢川緑道 ユリの木公園 ④船橋の希望丘公園 ⑤芦花公園と 粕谷八幡一带 ⑥大蔵の総合運動場 ⑦砧ファミリーパーク ⑧馬事公苑界わい ⑨駒沢緑泉公園 ⑩駒沢オリンピック公園 ⑪上野毛自然公園 ⑫玉川野毛町公園			
II 群 自然と歴史を主題とした風景							
F：道のある風景	G：田園風景	H：寺院と神社および旧跡					
⑬大山道と池尻稲荷 ⑭北沢川緑道桜並木と 代沢の桜祭り ⑮代沢の住宅街 ⑯蛇崩川緑道 ⑰松原の ミニいちょう並木 ⑱日大文理学部の桜 ⑲上北沢の桜並木 ⑳旧甲州街道筋 ㉑上祖師谷の六郷川無道 ㉒成城学園の いちょう並木 ㉓成城の桜並木 ㉔成城住宅街の生け垣	⑭成城3丁目桜と もみじの並木 ⑮大蔵団地と桜 ⑯岡本3丁目の坂道 ⑰多摩川沿いの松林 ⑱多摩川上手の桜 ㉒はなみずぎ並木の 二子玉川界わい ㉓桜並木の呑川と緑道 ㉔谷沢川桜と柳の堤 ㉕田園調布の いちょう並木	⑬北烏山の田園風景 ⑭給田小学校の民俗館 ⑮岡本民家園とその一带 ⑯北沢島 ⑰淡島の灸の森蔵寺 ⑱羽根木神社の参道 ㉒松陰神社と若林公園 ㉓上馬の駒留八幡神社 ㉔さぎ草ゆかりの常盤塚 ㉕招き猫の豪徳寺 ㉖世田谷城址公園 ㉗弦巻實相院界わい ㉘宮ノ坂勝光院と竹林 ㉙奉納相撲の世田谷八幡 ㉚松原の菅原神社 ㉛烏山寺町 ㉜武家屋敷風の安穏寺			③世田谷観音とその一带 ④太子堂圓泉寺と けやき並木 ⑤上祖師谷神明社 ⑥喜多見水川神社と 辯善寺跡 ⑦喜多見慶元寺界わい ⑧宇奈根水川神社 ⑨大蔵の永安寺 ⑩瀬田の行善寺と 行善寺坂 ⑪用賀観音の無量寺 ⑫野毛の善養寺と 六所神社 ⑬等々力の満願寺 ⑭等々力の玉川神社と その周辺 ⑮お面かぶりの 九品仏と参道		
III 群 歴史を主題とした風景			そ の 他				
I：祭り	J：街のにぎわい	K：近代的風景					
⑩北沢八幡の秋祭り ⑪天狗まつりと真竜寺 ⑫下北沢の阿波おどり ⑬ボロ市と代官屋敷 ⑭収穫祭と東京農大 ⑮経堂の阿波おどりと 万燈みこし ⑯下高井戸の阿波おどり ⑰多摩川灯ろう流し ⑱サマー世田谷 ふるさと区民まつり	⑤太子堂下ノ谷界わい ⑥若者と下北沢のまち ⑦下北沢北口の市場	④世田谷線(玉竜)が走る ⑤駒沢給水所の給水塔 ⑥廻沢のガスタンク ⑦環アメリカ村 ⑧奥沢駅前の広場	⑨代沢阿川家の門 ⑩岡本玉川幼稚園と水神橋 ⑪岡本静嘉堂文庫 ⑫上野毛五島美術館一带				

Dの「名木」とEの「公園」は自然を主題とした風景の中に含まれていますが、A/B/Cの風景と違い、人の手によって作られた風景と言うことができるのではないのでしょうか。



世田谷百景④招き猫の豪徳寺

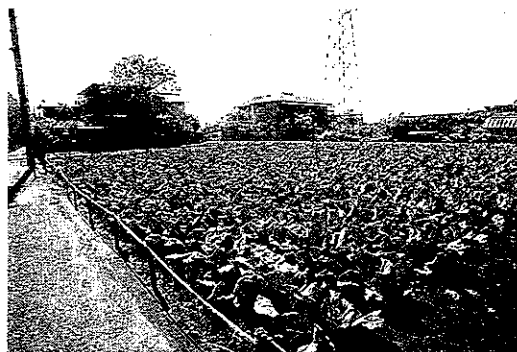
F/G/Hは自然と歴史を主題とした風景です。Fの「道のある風景」は緑道や坂道、あるいは旧街道などの風景で、道のまわりに桜や銀杏などの樹木が配されています。道は昔から人の往米や物資の運搬などの役目を担っており、町の発展を支えてきました。道を通じて町の歴史は作られてきたとも言えるでしょう。そうした意味で、「道のある風景」は自然と歴史を主題とした風景の中に入れられると思います。



世田谷百景⑥上北沢の桜並木

Gの「田園風景」には岡本民家園が含まれています。岡本民家園は次大夫堀民家園の姉妹園で、昭和55年12月に開園されてい

ます。茅葺^{かやぶき}の古民家1棟と土蔵1棟が移築され、昔の農家のたたずまいを再現しています。江戸時代から大消費都市・江戸の近郊農村として発展してきた世田谷には、昭和初期まで茅葺の農家と田んぼや畑の広がる農村風景が見られました。しかしながら昭和30年代以降の高度経済成長の中で、世田谷の農村風景は急激に失われてしまったのです。



世田谷百景④北烏山の田園風景

Hの「寺院と神社および旧跡」には最も多い26景が含まれています。世田谷区民が一番親しみを感じることでできる風景と言えるでしょう。騒音や大気汚染などといった都市の喧騒^{けんそう}から逃れられる身近な場所が寺院や神社の境内なのかも知れません。樹木に囲まれた境内に入って、何となくひんやりとした空気に触れ、古い歴史を伝える本堂を見上げると、やはり心が落ちつくのではないのでしょうか。



世田谷百景⑤日大理工学部の桜



世田谷百景③世田谷観音とその一帯

I/J/Kは歴史を主題とした風景として分類しました。Iの「祭り」には400年の歴史を持つ②の「ボロ市と代官屋敷」から、近年開催されるようになった⑥の「サマー世田谷ふるさと区民まつり」まで様々な歴史を持つ祭りが含まれています。

Jの「街のにぎわい」とKの「近代的風景」は区民の日常生活と近代の歴史を示す風景で、Iの「祭り」とともに自然を主題としていない点において、I群/II群の風景とは異なる風景です。

さてこれまでは、A~Kに小分類した各風景について説明してきましたが、「世田谷百景」全体を見渡した場合にはどのようなことが言えるのでしょうか。



世田谷百景⑫世田谷城址公園

数量的にはII群の「自然と歴史を主題とした風景」が圧倒的に多く、半数を占めています。これにI群の「自然を主題とした風景」を加えると79景となり、全体の約

80%にも及ぶこととなります。このことから世田谷区民が好ましいと思う風景には自然が入っていなければならないとすることができます。ただしそれは、身近にある自然でなければなりません。

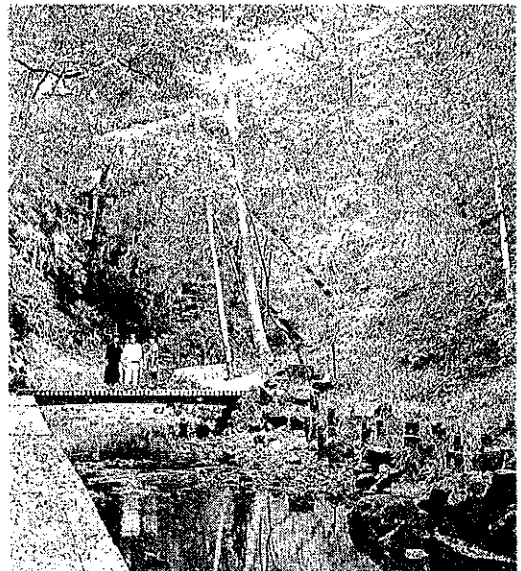
表2は世田谷区の小学校/中学校合わせて96校の校歌の中で歌われている富士山/多摩川/武蔵野についてまとめたものです。

表2

	富士山	多摩川	武蔵野	学校数
明治	7	3	1	12
大正	1	0	1	2
戦前	15	8	9	19
戦後	45	21	13	63
合計	68	32	24	96

この表に見られるとおり、富士山は96校中68の校歌（70%）の中で歌われています。同じく多摩川は32の校歌（33%）、武蔵野は24の校歌（25%）とそれぞれ高い割合を占めていることがわかります。

富士山/多摩川/武蔵野は校歌の中で歌い継がれている最も人気のある世田谷の風景と言えるでしょう。



世田谷百景⑤等々力溪谷と等々力不動

しかしながら「世田谷百景」の中では、

Aの「富士山に見える風景」はわずかに2景、Bの「水辺の風景」の中で多摩川は3景、Cの「武蔵野の風景」も5景だけで順位も低く、決して人気のある風景とは言えません。それは富士山も多摩川も、そして武蔵野も、現在の区民にとって身近な風景ではなくなってしまったからではないでしょうか。



世田谷百景③松原の菅原神社

高層ビルの建ち並んだ街の中では容易に富士山をながめることはできません。昭和30年代までは釣人や水遊びする人々ににぎわいを見せていた多摩川も、昭和40年代になると汚れがひどくなり、もはや人々の関心を引くことはできなくなってしまいました。「武蔵野の風景」に関して同じことが言えるでしょう。宅地開発が進む中で次々と武蔵野の風景は姿を消してしまい、人々の暮らしとは無縁のものになったのです。



世田谷百景⑦成城3・4丁目の崖線

一方、「世田谷百景」の中で最も人気のある風景はと言えば、Hの「寺院と神社お

よび旧跡」(26景)、Fの「道のある風景」(21景)、Eの「公園」(12景)です。いずれも区民が身近に接することのできる風景であり、日常生活の中で散歩したり、遊んだり、参詣したりなどと気軽に親しむことのできる風景ではないでしょうか。



世田谷百景⑩多摩川沿いの松林



世田谷百景⑨成城学園前のいちょう並木



世田谷百景⑪谷沢川桜と柳の堤

以上、昭和59年に区民によって選ばれた「世田谷百景」の分析から次のようなことがわかりました。すなわち、世田谷区民が好ましいと思える風景には、

◎自然があること

◎身のまわりにおいて、日頃から親しめること

◎歴史を感じられること

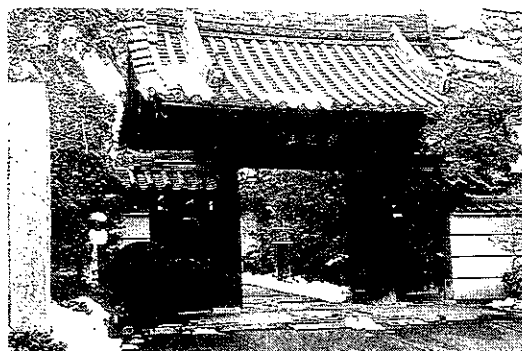
の3つの要素が必要です。



世田谷百景④旧甲州街道筋

IV おわりに

1992年12月にアメリカのサンタフェで第16回世界遺産委員会が開かれました。その中で世界遺産に指定すべきものとして「文化的景観」を含めることが決定されています。



世田谷百景⑥用賀観音の無量寺

文化的景観というのは、自然的側面だけではなく、その地域に固有の伝統や習慣あるいは生活様式といった文化的側面をも併せ持つ風景のことです。(本中眞)つまり、「世田谷百景」の中で分類したⅡ群の「自然と歴史を主題とした風景」がこれに当たります。

次大夫堀民家園も文化的景観として、世田谷の歴史／伝統／人々の暮らし、さらには世田谷の自然を後世に伝える風景でなければなりません。つまり、歴史的・文化的側面と自然的側面から「世田谷らしさ」を感じることでできるものでなければならぬということです。そのことによって次大夫堀民家園は、区民から親しまれ愛される風景になることができると思われまます。



世田谷百景⑧喜多見慶元寺界わい

*参考文献

樋口忠彦 『日本の景観』 筑摩書房

宮家 準 『宗教民俗学への招待』 丸善

阿部 一 『日本空間の誕生』 せりか書房

本中 眞 「世界遺産の『文化的景観』に関する諸問題」『月間文化財』381号

区都市デザイン室『せたがや百景』

佐藤健二 『風景の生産・風景の解放』

講談社

岩田慶治 『日本人の原風景』 淡交社

中村良夫 『風景学入門』 中央公論社

区文化財資料調査員 高見寛孝